



Title	追悼 池上禎造先生
Author(s)	宮地, 裕
Citation	語文. 2004, 86, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69068">https://hdl.handle.net/11094/69068</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



池上 禎造 名譽教授 近影

# 追悼 池上楨造先生

宮 地 裕

相逢うて相別る是れ人生ではあるが、先生のさりげないささやきのような辛口の寸評に、もはや耳を傾けることはできなくなつた。昭和二年（一九四七）京大国文学以来のご縁を、ここに惜別の想いを以て二三の断章として記しとどめる。

○

昭和五九年（一九八四）七月付けのお葉書の、いただいた先生の著書『漢語研究の構想』（同年同月、岩波書店刊）に挟み込んであったものをここに掲出させていただく。

「暑中の御挨拶よりも御無沙汰のおわびから始めなければなりません

先年小生古稀にあたりましては 過分の御祝にあづかり恐れ入りました これを踏切台に新しい日々をと会の折に申しましたのに 初めてひたる自由の時間に欲する所に従って矩をこえたり 頼みの眼や足腰にも及ぶ老化にかまけたり 心ならずも永く失礼致しました この度漸く旧稿の一部を集めて一本とな

しましたので 感謝のしるしまでにお届け申し上げます 古いものながら意とするところをお汲みいただければ幸に存じます  
暑さの折 御健勝を祈ります

昭和五十九年七月

○（住所・氏名と先生の小さい字の添え書きは省略。）

一二注する。先生は明治四四年（一九一一）のお生まれだから、古希のお祝いは昭和五六年（一九八一）にしたので、書中の「御無沙汰のおわびから」は三年の時間によるものだが、先生の筆不精は例のことであつた。時間の流れが濃すぎて延びてゆくのかと思つていた。ある時、「ひと月間の新聞をこれから読もうと思つて積み上げてある」と洩らされたこともある。また、京都にいた頃お世話になつた国語学研究会は、放談会の趣きがあつて自由闊達なものだったが、ある夜、だれかが四コマ漫画を話題にした。最後のひとコマの吹き出しをブランクにしてどういふ言葉を入れ

るか、わいわい言いあった。一五分ほどしてからだったか、「最後に先生どうぞ」と促されて、仕方なく先生が言われたのは「はい」の一語であって、一同思わず吹き出した。微笑と沈黙の一五分が、すばらしい間となってみんなの笑いを誘った。(妙なことを覚えていたものだ。)

書中の「初めてひたる自由の時間」は、阪大のあとの南山大学を定年退職なさって「初めてひたる」の意。「旧稿の一部」とあるが、精華を編んでの意とお察しする。論文二二篇、附論一篇、先生の学問の概要を察するに足りる。

○

その足跡を顧みられた「あとがき」にもあるが、先生の学問は、(不肖の弟子の物言いでは先生の苦笑を思い浮かべながら記すのだが)漢語を核とする書記言語としての日本語、日本人の書記言語生活、そしてその歴史への洞察だ、と思う。「学生時代から情熱をもやした古代日本語の音韻」、言うまでもなく古代日本語に母音調和の痕跡を推測された論文「古事記に於ける仮名『毛・母』に就いて」(昭和七年(一九三二)一〇月『国語・国文』)から始まって、「もっと足場を固める必要」を考えて、文献の漢字使用の実態を、その史的研究としてばかりでなく、言語接触の形態として考究された。漢語を日本語の通時的・共時的研究の核として対象化されたと言ってもいいだろう。

先生の論文は専門家を読者に想定し、贅言を省き一言一句に配慮して書かれている。私はいまだに読みこなせていないと思うと

ころがある。最初の論文も当時の学界の注目する所となったそうだが、その後の文字論・漢語論関係の論文等についても、山田俊雄氏ほかの専門家や学界の評価は高かった。

○

京大国文の機関誌『国語・国文』は戦争中休刊になっていて、戦後復刊のことが計られたとき、大学院生だった私は、学会の機関誌というものの復刊、その原稿の割付から校正に至るまでの多くのことを先生から教えられた。送料の割引のために当時の郵政省の何課だったかに一人で出かけて、学術雑誌定期刊行物の認可をもらったことも記憶にあるが、多くは先生に手取り足取りしていただいて、ご迷惑をかけながら半人前に育てていただいた。

そんな私を国立国語研究所から阪大に招かれるとき、先生はその一年足らず前の私の論文「同音語のアクセント」(『国語・国文』三八二号)を評価してくださった。日本語のアクセントがどれぐらい語の意味の弁別に役立つかを、小さい調査をもとに論述して、二拍和語で半分ぐらいだということなどを述べたものだが、とにかく弟子は師匠に褒められたことを忘れないものだと思う。

○

先生の阪大ご退官の時、阪大の『語文』は記念号を編んだ。昭和四九年(一九七四)九月刊第三二号のことで、すでに三二年昔のことである。冒頭に「池上楨造先生の退官にあたって」の一文を草して、先生の業績の一端にも触れた。「先生の研究は、もとよりこれを文字史・語彙史・言語生活史のからみのなかに位置づ

けて、網のむすび目の一つとして認識されたときに、はじめて価値がわかるたぐいのものであらうとおもう」「精緻な考証の可なたを見とおさなければならぬ」「先生は網全体の素描はされるが、網そのものをあみあげようとは、なさらない」などである。また、その年の三月「後進にのこされたことばは、『みずからを知れ』ということであった。自分のしごとの位置やレベルを省察し、みずからの限界や分を知って、『真理に対して謙虚であってほしい』と、簡潔に述べられた。」ともある。

寄稿論文執筆者一二名の中には、すでに先立たれたかたが数名ある。三年あとに当たられる中村幸彦先生の「深川通言と上方語」も懐かしい論文である。旧仮名遣いで、ところどころ文語調が混じっている。この点では池上先生のほうが少し順応が速かった。前掲のお葉書の促音表記は小字で「従って」とあるが、仮名遣いは「あづかり」と旧仮名である。また、旧習に従って句読点がない。戦後の日本の表記法の激変を経てこられた先生に、そのご所見を承る機会を逸してしまった。今や先生を加えて、あちらでどのようなお話をしておられるのであらうか。

(尽きぬ想いを日本語学会『日本語の研究』にも寄せる。本年秋の号とのことである。)

(二〇〇六・〇三・二)

— 本学名誉教授 —